



Title	歯医者さんでカフェ : 地域と対話すること
Author(s)	文元, 基宝
Citation	臨床哲学のメチエ. 2013, 20, p. 30-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24938">https://hdl.handle.net/11094/24938</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 歯医者さんでカフェ

—地域と対話するということ—

文元基宝

## 1. コンビカフェ (Com-be café)

「今回のテーマは、キャッチ & リリースです。捕まえた魚を持ち帰るのか、それとも逃すのか。」釣りをテーマに会話が弾む。お菓子をつまみながら、お茶を飲みながら、話題は転々と方向を変える。井戸端会議のような様相である。そう、「コンビカフェ」は歯科医院での現代版「井戸端会議」という表現が似合っている。

コンビカフェは哲学的な議論に発展しない。そこを目指してもいない。地域の集会場を目指しているのかもしれない。テーマを呼び水に、参加者それぞれの話したいこと、聞きたいことなど話題は転々と変遷していく。待合室一杯の参加人数のときもあれば、店主だけのときもある。カフェの場を過度にコントロールしようとせず、参加者の動きに任せようと心がけている。参加者同士のダイナミズムを期待している。場がコントロールしてくれるのだ。

ある深刻な悩みをもった参加者がいれば、話題は自ずとそちらへ向かっていく。先日の「釣りカフェ」でもそれを経験した。「引きこもり歴」17年のT君は、社会に出てから3年目である。ここ数週間、心が塞ぎ、焦りと不安で身動きできない状態であったそうだ。

「いろいろな情報が頭を駆け巡り、何をしたらいいのかわかりません。」T君の問題に話題が転回した。T君に様々な意見が送られる。しかし、T君の問題を具体的に解決するような助言ではない。参加者は自分の問題として置きかえて、自分の経験を元にそれぞれの意見を述べているようだった。そして話題はまた転々と変わる。

「ちょっと楽になりましたわ。」T君はこのような場が落ち着くようだ。

カフェ常連のMさんは、「僕は情報の仕分けをしていると思う。耳に入ってくる情報を僕にとって必要かどうか、瞬時に判断していると思う。不必要な情報と思ったら耳に入れない。そうしたら非常に楽に生きられるよ。いろいろな経験をして自然と出来るようになったと思う。T君の話聞いて、振り返ってみると僕は自然と耳にフィルターを掛けているのだなあ気づいたわ」と語った。

「魚も情報も、何をキャッチして、リリースするか？ しないのか？ 常に判断が必要なのかもしれないですね。ということで。」店主はカフェを締めくくった。

店主啓白

## 2. 地域と対話するということ

### i) 地域医療

そもそもなぜ、歯科医院で「対話型カフェ」なのか？私は地域医療探求の一形態として、そして地域を発見、発明する時空間としてカフェを位置づけている。そもそも地域の住民の暮らしを起点として、医療は開始されねばならない。しかし、その地域が見えにくい。地域コミュニティが行政区画の「地区」に住むアトム化した個々人の集合体に変容したのだろうか。他方、医療も専門医学の応用に特化しすぎているのではないだろうか。専門知という「(リスクを明示した)真理」をもって患者を援助することに偏りすぎてはいないだろうか。あるいは医療サービス提供者—受給者という医療者×患者関係に固着し過ぎてはいないだろうか。このような疑問から私は、定かではない地域と対話していこうと試みている。



### ii) 中間地帯

歯科医院の待合室は、地域と診療所をつなぐ中間地帯である。子供たちが遊ぶ「おもちゃ」や「絵本」は患者さんからの寄付である。待合室の掲示板に寄付を募ったところ、多くの方から使われなくなったおもちゃや絵本が提供された。またボランティア活動をしている患者さんからの依頼で、ボランティア募集の貼紙を掲載したところ、すぐに協力する方が現われた。待合室は地域住民を媒介する。

強烈なのは、子供たちである。診療所横の公園で遊ぶ子供たちである。公園にはトイレがないので、待合室のトイレを借用する。玄関のマットは泥だらけ、トイレは汚す。歯科医院にとっては異他的存在者であり、境界を侵す侵入者である。この侵入者に対する対応をスタッフで議論した。子供たちも困っているので邪見に扱うこともできず、私たちも困った。結論は「叱る」である。「トイレを貸してください」と言わなければ「叱る」。トイレを汚したら掃除をさせる。叱ることに慣れていない受付スタッフが変わって、患者さんが叱ってくれることもあった。このように継続して根気よく接していくとお互いに変容したのである。子供たちは礼儀正しく振る舞うようになり、トイレも汚さなくなった。子供たちの間では、「歯医者さんでトイレを汚すな。借りるときは挨拶をしろ」がルールとして伝播していったらしい。

子供たちにムシ歯をイメージした絵を描いてもらった。それをネタに「ムシ歯カフェ」を開催し、子供たちと一緒にムシ歯の絵を描いた。もう忘れていた子供たちの世界に触れることができた。このように両者の関係は変容したのだ。

このトイレ事件は、私たち医療者にとって大きな転機であった。待合室は地域にとっても医療者にとっても、歯科医院という境界を問いなおす重要な中間地帯であると。トイレを借りにくる子供たちは、人々が出会い、交流する中間地帯の豊さを教えてくれた。侵入者から地域の伝達者となったのである。

### iii) 共にある (Com-be)

地域との対話の試みは、われわれ医療者に反省を促す。地域には医療よりも大切なことがたくさんあるということだ。それは人々が人々を排除せず、共存すること、共存できるようにすることである。そこから、医療を考えてみたい。

小さな試みであるが、歯医者者を街の集会所として開いてみようと思う。

対話をつづけていく。

◇ふみもと もとたか

歯科医。元元歯科医院(大阪府大阪市東成区)院長。

「健康な人が来る歯科医院」をコンセプトに、QOLの向上を目指して予防歯科に力を注ぐとともに、2012年度まで大阪大学大学院文学研究科の臨床哲学研究室に社会人院生として在籍し、well-beingをヘーゲル哲学の観点から考察する修士論文を執筆した。